

小さな行動に大きな愛を

(原文)

内藤 志織 (16 歳)

東京都

昭和女子大学附属昭和高等学校

震災の映像を見る度、「何かしなければ。」と思いながらも何も出来ない自分にとて歯がゆく感じる。募金はした、節電もした。しかし日が経つにつれ、そういった気持ちもだんだん薄れいつの間にか普通の生活に戻ってしまおう。

ある日マザー・テレサの「小さな行動に大きな愛を。」の言葉に出会った。それは、何かしたいのに何も出来ない自分の無力さに、ヒントを与えてくれたような気がした。

あれは私が小学三年生の時。忘れもしない二〇一一年三月十一日。二万人近くの命が奪われたあの日。茨城の小学校に通っていた終礼時に地震は起きた。恐怖で全身がふるえ先生に誘導されてグラウンドに出た。途中、飼育していた水槽が割れていて、かわいがっていた小魚が床の上で口をパクパクさせていた。魚を水に戻してあげたいのと心の中で思いながらも、先生の真剣な誘導の号令に声を出すことすら出来なかった。グラウンドで家族の迎えを待ちながら友人が一人一人と帰っていった。ようやく職場からかけつけた母親が走ってくるのが見えた。私は突然涙があふれ母に抱きついた。母に会えた安心した気持ちも停電中の暗い家をろうそくで灯した際に一気に吹っ飛んだ。それは朝出た家の中の状態とはまるで変わっていたからだ。リビングは家具が全て横倒しになっていて、台所も皿やガラスが落ちて入ることも出来なかった。とりあえず和室で家族はかたまって夜を明かした。

次の日何度も続く揺れを感じながらテレビをつけた。現実とは思えない津波の映像が流れている。私はそこから動くことが出来なかった。家は断水が一週間続いた。水道をひねれば水が出てくるという当たり前だと思っていたことが当たり前ではないという現実をその時はじめて味わった。それから数日後にシャワーを浴び温かいお湯が出ることに感謝した。ごく当たり前のことが心から有り難いと思いうれしかった。日常がとても素晴らしいと気づくきっかけになった。

東京電力が悪い、政府が悪いと文句ばかり言っている中で、給水の知らせを持ってきてくれた市役所の人や日用品を送ってくれた親戚、心配して連絡をくれる知人、すべての人に感謝した。

そうだ、自分が行う小さな行動、確かにそれはちっぽけなことかもしれない。でもそこに愛を込めて行う、自分からおこす“愛”の行動によって相手だけではなく自分自身を作り出すもとなると気がついた。

“あなたの愛が表情や眼差し、微笑み、言葉にあらわれるようにするのです。”マザー・テレサのこと

ばより“何ができるか”ではなく自分で“何がしたいか”だ。一人一人が愛を込めて自分の役割を見い出していかなければ、ちっぽけなことでもやがて大きな力となると思う。そうした気持ちも各自が持てば銃や砲弾が世界を支配するのではなく愛が世界を支配すると誰もが思っていると思う。